

たが、テラスに出ないとどうしようもない。テラスまであと1mというところで何分ぐらいいたであろうか。突然転落、ハーケンがぬけたのだ。幸にかかり傷程度ですんだが、状況、状態を見て無理することなく、岩登を中止する。

3月11日快晴。今日一日休養してあす縦走にうつることにする。

3月12日快晴。7:30 コルを発ち花江河にむかう途中、雪はほとんどないのだが、ヤクザサが背たけほどもあり、キスをかついではとても歩きづらい。花江河まで、そう時間はかかるないので、のんびりした歩調である。それほど起伏もなく、純日本式庭園なるものをながめながらも、俗化されていないこの山を歩くとき、きびしさというものは感じられない。

3月13日雨。湯泊への道はかなりひどいものである。大本が道をふさぎ、とても歩きにくいし、かなり危険なところも歩かねばならない。この雨だから、ほんとうに黙々と歩くのみである。湯泊へついたのは16:50である。長い道中であった。

## (2) 永田岳北尾根

古谷 精宏

3月2日雨。小雨降る宮の浦の小石の多い浜へハシケでおりたった。すぐバスで中野さんと私は吉田へ、他のメンバーは永田へと向った。まず一湊で現地連絡本部をしていただいている山本さんに屋久島の様子をきき、吉田では青年団長ともあって公民館をお世話していただいた。青年団長に吉田岳への取付を教わった。吉田岳まではルートが有るとの事であったが、それ以後の永田岳までのルートは、全く知識は得られなかった。

3月3日雨。屋久島特有の雨が今日も屋久島のジャングルの木の葉を濡

らしていた。しかし、屋久島の雨は我々は事前に考えていた事でもあったのでカッパをつけて出発、吉田の段々畑を泥で足を取られながら進んでいったが、3ピッチほどジャングル突入の浮目にあい、赤布を入口につけ進む。苔を身につけた大木がうっそうと茂るまったくの原始林だ。地図と磁石を見ながら進む。尾根筋に出てやっと道を見つけ、それに沿って行けば吉田岳だ。我々は勇み立ったーそして進んだ。

だらだら道から人工的に石を積んだらしい苔のへばりつく急な道を進む。吉田岳のピークはもうすぐだと思われたが、時間も午後3時を示しており、都合よく横に沢が流れていたので、そこにツエルトを張る。

3月4日曇時々晴。ビバーク地点よりさらに苔を踏んで一ピッチ目で二つの分岐に出くわし、左側の急勾配を一気に登る。吉田ピークだ。ススキが杏れていたが、白く光り、小さな素朴な祭壇が作ってあり、杉の木に「ヨシダ」と彫ってあった。しかしひークは2~3メートル四方のせまい所で、すぐ木々におおわれて道は、続いていなかった。そこで切株より地図を頼ってみると指す永田岳はおろか、坪切山すらもガスって見えないー午前8時30分、吉田岳の急坂を下って元の分岐を右取り湿地を踏んで進む。しかしこの道は途中から右に折れ永田部落に続いている様なので引き返し、ブッシュをこぐ。緑の葉が露に光って美しいが今はそれどころではない。ブッシュをこいで第一のピークに立ち笑筈のピークだと思ったりして大いに迷い、時間をくわれた。そうこうしている時ガスの切れ間より坪切山のピークが南に、その北に伸びている尾根が西に見えるー午後1時40分、うれしかった。南西にブッシュをトラバースしながら進むが、又もガスって方向ますます不明ー2時30分ビバークと決定す。ビバーク地の現在地をガスの晴間よりほぼ見当をつける。

3月5日晴。朝まだ早いせいか昨日と同じ様にガスって何も見えない。しかし、昨日見た坪切山への尾根を求めて、西へ苔むした老木がたおれ、そ

れが朝もやの灰色のヴエールに包まれ、幻想的な世界を造り出している永田川の支流と思われる沢へ下り、水を給入して進む。

午前7時5分、昨日引き返した道に出る。

やはりおかしい。道は尾根の復を巻いて永田部落の方向に続いている。鞍部に返り南へジャングルに突入。木々はスキ間を見つけては已の枝を伸ばしているようにすら思え、サックが引っかかるのを力まかせに引っぱって前進する。イバラにまかれたり、鹿のフンに顔を近づける様にして腹ばいになって進んだりした。笑箸のピークに立った時一午前8時45分ガスは切れ、はるか南方、永田岳の岩峰が黒々とそびえたち、又宮の浦岳の滑めらかなピークも見える。我々は勇み、南へ、イバラとシャクナゲの木々等に悩まされながら南へ進む。坪切山近くは一つの巨大な岩が杉や笹をその体にへばりつかせながら我々の前進をさまたげる。坪切山は少し東へ巻き気味に通過し南へ進む。坪切より三つ目の岩峰を越した鞍部すでに五時、設営を決定する。

3月6日曇のち雨。午前7時5分、鞍部を出発するが少し行くと目の前に岩壁だ。ガリーを50mほど小枝や笹をつかみながら下って右に巻き気味にトランバースして四つ目の岩峰の前に出る。スラブの連続だが、ザイルは出しただけだ。しかし70度近いスラブを笹や細い杉の木をつたって下る気持は何んともいえないやな気持だ。一日中岩峰の上り下りであけたが昼頃大障子の前に出て大障子の巨大な岩峰と美くしい奇岩を見ながらルートファインディングをやるが、すぐガスってきてそのルートも又ガスにのまれた。その上屋久島名物の雨が降って来た。しかし、予備日をくい込んでいる現在、我々に残された道はただ前進するのみである。雨に濡れた岩を注意深く登りながら大障子を過ぎ、三つ目のコイルを経た所で次のスラブは雨水が滝状になっているので左に大きく巻く。しかし巻き方が大きすぎたのか、東へ伸びている尾根に出る。そこで設営。雨が強く、我々の衣服はもちろんの事、ザックの中のシュラフに至るまでグッショリと濡れ、靴はズクズク、その上風が強烈で我々のビバークをより苦しい物にした。

3月7日雨。今日は昼頃までにB.Cに着ける予定である。7時30分、印象の悪いピバーク地点を出る。

雨はますます強さを増していたが、尾根の側面を巻いて低い屋 笹の茂る屋根に出る。我々は永田岳近しをひしひしと感じた。しかしガスは強く奇妙な岩が灰色のヴェールの向こうから急に顔を出しては又消える。尾根が広く方向が定かでない。磁石を頼って笹を分けるがどうもうまく行けない。地図が誤っているのは昨日で明らかであった。

引き返したりしながらどうもリングワンデリングを2度程やったらしい。そのうち三角点を見つけて南下したが行けず、ついに現在地不明のままピバーグー午後1時30分。我々2人はグッタリと濡れたシュラフにもぐりこむが気が重く眠れない。風がツェルトを今にも破きそうな音をたてていた。

3月8日曇のち晴。朝あたりを偵察するがガスってどうにもならない。天気の回復を待つのみだ。今日は6日目。予備一杯を使ったことになる。食料、ガソリンが残り少ない。しかし、後3日の食糧を残さなければ一朝食はお茶漬である。サポート隊は心配しているだろう。ラジオでは、今日は晴れとの事だが、この様子はなんとした事だろう。私の顔に「遭難」という二字がかかる。外はガスで5m程しか見えない。昨日と同じ様だ。12時30分頃相談の結果、明日も同じ様だとしても食糧の事もあって行動しなくてはならない。それならば今日の行動にかけようと出発準備をする。午後1時30分、遅くれたが出発する。うまく行けば2~3時間で永田岳へ行けるだろうことは現在地不明といえど明らかであった。南へ向う。が少し行くと下へ切れ、引き返す。露が白く凍った屋久笹を分け入るうちガスが切れ始めた。「天気は回復する」我は待ちに待った。そして宮の浦の尾根が現われ、時間午後2時10分、永田岳、宮の浦岳が目前に現われた。岩の上で見たこの光景は一生忘れぬ思い出となるであろう。ほんの数秒とも言いがたい間の事であった。私は「万歳!」「イヤッホー」何を叫んだか明らかでないが、中野さんの背にとびついた。とにかく永田岳への方向、行くべきコルはわかった。我

々はブッシュを無我夢中でよじ登った。尾根に出たとき、ガスがれて宮の浦のピーク、永田岳の岩峰が見える。やっと周囲一面のエビのシッポで光る屋久笠の美くしさをゆっくりとおちついて見る事が出来た。パンを食い出発。時々左方に宮の浦のピークがガスの切れ目よりながめられる。永田岳より宮の浦河へ出ている小さな尾根をこえて腹面を巻く様にコルへ急ぐ。永田岳ピーク直下に着いた時、下方にエビのシッポの一面白く光る笠の中に黄色いテントが我々の目に痛い様にうつる。我々は声を合せてコールした。心浮き浮きしてコルに黄色く光る冬テントを眼下に見おろしながら声を上げながら下る。和田さん、増瀬さん、三戸、三浦の顔がみえる。感激の対面6日ぶりだ。私は顔のこわばるのをおさえるべく努力しなければならなかった。午後4時10分、グッショリ濡れた体をワインバーテントにもぐりこんだ時、私の生きている事の喜びを今さらの様に感じた物だった。夜B Cのコルの空は星が一杯輝やき、我々の北尾根成功を祝福するかの様だった。

## 2 利尻岳東稜および南稜（1966年3月の記録）三浦嘉孝

2度に渡る知床半島や屋久島と、毎年春になるとなにか逃げるようにな最果ての静かな山を求めてきた。そして今年も利尻岳に遠征が決った。メンバ的には、必ずしも十分とは言えなかつたが、OBの参加もあり、とにかくやってみることにした。計画が具体化するにつれ、トレーニングも急ピッチで進められて行った。そして失敗には終つたが、その年の冬の北鎌尾根での苦闘が、大きな自信ともなつた。目標は東稜と南稜だったが、結果は東稜のみに終つた。後期の試験も終り、あわただしい準備の末、遠征気分で大阪を発つのは3月8日の早朝であった。

3月10日 重く雲の垂下がつた鬼脇港へ着いたときは、長い汽車旅と船酔のため足がふらついていた。さっそく連絡しておいた工藤松太郎氏宅へ向うと、快くわれわれを向えてくださつたうえ、倉庫の2階まで拝借させていただいた。寒氣は厳しいが、格好のB Hとなりそうだ。午後から食糧、装備